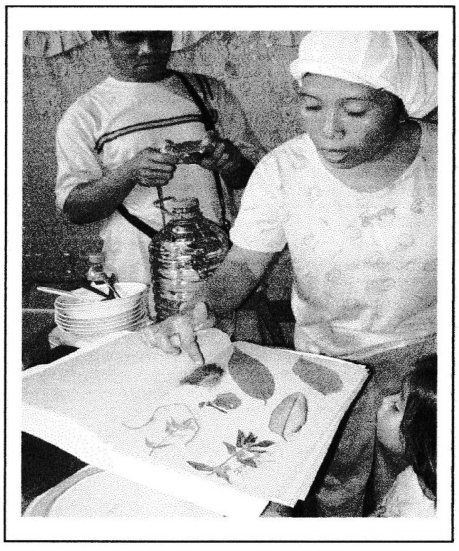
ハーブ薬は
こうやって作ります

渡辺せい子

パササンバオ、この舌を噛みそうな名前はPasasanbao Integrated Health Serviceの略称。フィリピンの中でもさらに貧しいミンダナオ島の中にあって、ここのスタッフは、モロ民族のコミュニティを巡って、病気の治療に始まり、鍼灸・指圧、薬草を利用した治療や予防を行なっている。

11 月の末に山崎さん・相田さんと共にティナガカンTinagacanコミュニティを訪問した。パササンバオ・ヘルス&トレーニングセンターと銘打ち、ヤシで屋根をふいた集会所に大勢の女性が集まって「ハーブ薬作り」が本日のメーンイベント。

ラグンディ(Ragndi)の葉を砂糖とともに煮詰めれば喘息に卓効ありとのこと。りっぱな喘息患者である私は恰好なモデルケースになれそう。皆で楽しくコンロを囲んで、和気あいあいと薬作りが始まった。摘んできた山盛りの葉っぱを鍋で煮詰めるのだが、加える砂糖の量がはんぱじゃない。2 時間近く煮詰めたものを布でろ過して小瓶につめて出来上がり。舐めてみたら、なるほどあまーい。砂糖をたくさん加えるのは、ハーブだけだととんでもなく苦いので口当たりを良くするのと、長期保存のためと思われる。約 100ml が 30 ペソだった。沢山買って我が喘息に試してみたかったが、荷物が重くなるので 2 瓶のみで断念。果たして効き目は？



他にタワタワ（ Tawa-tawa 赤葉と白葉の2 種あり）は粉末にすればデング熱に効くし、葉から滲み出る白い液体は眼病に効くという。このハーブ薬の売り上げが僅かながらもコミュニティの収益となるので、何種類か揃えておけばちょっとした薬屋さんになるだろう。

左の写真はボランティアスタッフのノーアンさんが、薬草の標本を示して、ハーブとその効能について説明しているところ。日本で言えば漢方薬に当たると思うが、フィリピンには先祖伝来の薬草が数多くある。ここのコミュニティでは数種のハーブを育て、ハーブ園も作っていた。

貧しいフィリピンの人たちには、医者に処方されても薬を買えない人のほうが多い。だから手作りで薬を作って分けあうというこのパササンバオ方式は多くの支持が得られるのだと思う。このようにして学び実践した薬作りが周囲の村々に拡がっていくことが最も大事なのだと、スタッフは語ってくれた。

こちらは昼食を調理中

薬草を煮詰めている間、おいしい昼ごはんを、子どもたちを含め、集まったひと全員で楽しくごちそうになった。皆が集まって何かをするということがまれになってしまった日本。隣人に何が起こっていても気がつかない、あるいは気がつかないふりをしている日本人のエゴイズム、老人の孤独死などに思いを馳せたひとときであった。

「せい子さんのパササンバオ滞在記」がHANDSのホームページで連載中です。今回のお話以外に気づいたことや感じたことをわかりやすく語ってくださっています。アクセスしてみてね。

HANDS ホームページ
http://www.jca.apc.org/~hands/